

乳幼児の社会的行動の発達

— 実験的な場面での占有行動 —

青 井 教 子

問 題

「物の所有をめぐる争い」は、乳幼児期の子どもどうしの間で、非常に多く生じるできごとである（青井・宮川・小嶋, 1981; Bronson, 1981）。

「物の所有をめぐる争い」は、子どもの「こうしたい」という意志、「自分の物にしたい」という所有欲の表われと見ることができる。子どもの自我発達の程度によって、「物の所有をめぐる争い」は、その内容に変化が見られることが予想される。

「物の所有をめぐる争い」は、自分の主張や要求が他者のそれと対立するという経験である。こうしたことは他者の存在、自分と他者との関係の持ち方を学んでいく上で重要な経験であると言えよう。

本研究では、「物の所有をめぐる争い」の生じやすい場面を設定して、そこで生じる子ども2者間の相互作用を観察する。物に働きかけることが安定してできるようになっている時期（0歳代後半）から、1歳代後半および2歳までの子どもについて、「物の所有をめぐる争い」の生起の様子を、8～11カ月、1歳3カ月～1歳6カ月、1歳10カ月～2歳1カ月の3群間で比較する。

また、上の3群それぞれに対して、ペア間の年齢関係によって3つの群（8～11カ月については2つの群）を設け、子どもの所有に関する行動が、相手との月齢差によってどのように異なるかについて検討する。

方 法

被験児 日常的に同輩と接触する経験を持っている保育園の子どもを対象にした。名古屋市内の認可保育園14園の乳幼児118名を用いた。子どもの保育経験は平均11.7カ月、現在の保育園の在園期間は平均10.2カ月であった（それぞれのレンジは2～29カ月）。Table 1に各群の名称と、ケース数が示してある。表中の所有児というのは、所定の部屋に先にいて、所定のおもちゃで遊んでいる方の子どもであり、非所有児というのは、所有児の遊んでいる部屋に後からおもちゃを所有しないで来る子どもことである。

手続き 実験者は所有児を、他の子どものいない保育園の一室に入れ、市販のおもちゃ（マミート社のいたずらボックス）を与え、しばらくの間遊ばせる。

所有児がまわりの様子に慣れ、おもちゃを操作し続けるようになったら、実験者は非所有児を部屋に入れる。実験者は、ポータブルカセットレコーダーを用いて、2人の子どもの行動の口述記録を始める。

どちらかの子どもがおもちゃにさわれない、またはさわらない状態が続いたり、激しく泣くなどの状態が生じたり、20分程度経過して、これ以上別の事が生じないと実験者によって判断された時に、観察は終了した。

Table 1 各群の名称とケース数 (): ケース数

所有児>非所有児	所有児=非所有児	所有児<非所有児
———	Y — Y 群 (7)	Y — M 群 (7)
M — Y 群 (4)	M — M 群 (5)	M — O 群 (6)
O — M 群 (6)	O — O 群 (9)	O — O.O 群 (6)
O.O — O 群 (9)	———	———

注) ・ Y : 0.8～0.11, M : 1.3～1.6, O : 1.10～2.1
O.O : 2.5～2.8

・ O — O.O 群と所有児と非所有児の月齢が逆の組み合わせである O.O — O 群も合わせて行った。

期間 1982年9月下旬から同年12月下旬までの間に行われた。

結果の分析方法 上述の方法によって得られた口述記録から逐語録を作成した。これをもとに以下のような占有行動のカテゴリーを作成し、分類を行った。

- ・ 非言語的な占有行動 ①もつ, ②かかえる, ③ひざの上に乗せて遊ぶ, ④背中を向ける, ⑤引きよせる, ⑥持って（押して）移動, ⑦取りあい, ⑧相手をつかむ, ⑨相手の手をはらう, ⑩相手を押す, ⑪さえぎってする
- ・ 言語的な占有行動 ①音声による占有行動, ②言語による占有行動

また、以下の5つの点から、子ども2者間に生じた行動系列を分析した。①行動系列中に占有行動が含まれているかどうか。②どちらかの子どもが、おもちゃをさわれない、あるいはさわらない状態で、行動系列が終了しているかどうか。（この場合、おもちゃをさわっている

方の子どもを占有児と呼ぶことにする。)③非所有児が部屋に入って来て、所有児や所有児のおもちゃを見たり近づいたり、さわろうとした時に所有児は非所有児に対して占有行動(この場合の所有児の占有行動を、初期占有行動と呼ぶことにする)をしたかどうか。④非所有児は部屋に入った後、所有児や所有児のおもちゃを見たり、近づいたりするが、おもちゃにはさわらないという行動(初期遠慮行動と呼ぶことにする)が生じたかどうか。⑤2人の子どもが1つのおもちゃで同時に遊んでいる期間(共有期間と呼ぶことにする)が行動系列中にあるかどうか。

結 果

①行動系列中の占有行動の有無について Fig. 1 からわかるように、どの群においても、占有行動を含んだケースの方がそうでないケースより多くなっている。

②どちらかの子どもが占有児となって終了したケースについて Fig. 1 に示したように、Y-Y群ではどちらかの子どもが占有児となって終了するケースの占める割合があまり高くないのに対して、M-M群、O-O群ではこの割合が高い。

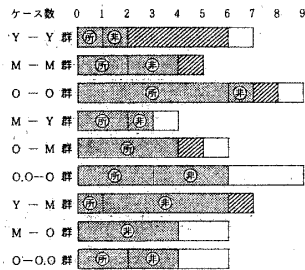


Fig. 1 占有行動を含んだケース数と占有行動を含まないケース数

占有行動を含んだケース

- 所有児が占有児となったケース
- 非所有児が占有児となったケース
- どちらの子どもも占有児にならないケース

占有行動を含まないケース □

所有児が占有児になることと、非所有児が占有児になることが、Y-Y群、M-M群では同程度生じているのに対して、O-O群では、所有児が占有児となること非所有児がなることより非常に多く生じている。

2人の子どもの月齢群が異なる群のいずれにおいてもどちらかの子どもが占有児となって終了するケースの占める割合が高くなっている。

Y月齢群とM月齢群、M月齢群とO月齢群の組み合わせである、M-Y群、O-M群、Y-M群、M-O群においては、月齢が上である方の子どもが占有児となるケ

ースが、月齢が下である子どもがなるケースよりも多く生じている。これに対して、O月齢群とO.O月齢群の組み合わせである、O.O-O群、O-O.O群においては、所有児が占有児になるケースと、非所有児が占有児になるケースは同程度生じている。

③所有児の初期占有行動について Fig. 2 に示したように、M月齢群の所有児(M-M群、M-Y群)に、自分と同月齢および自分より年下の非所有児に対して初期占有行動を示した者が多くは見られた。O月齢群の所有児(O-O群、O-M群)は、自分と同月齢および自分より年下の者に対して初期占有行動をM月齢群より多く示している。

Y月齢群、O.O月齢群の所有児は初期占有行動をとっていない。M月齢群、O月齢群の所有児において、自分より年上の者に対して初期占有行動をとった者は見られない。

④非所有児の初期遠慮行動について O月齢群の非所有児(O-O群、O.O-O群)に、自分と同月齢および自分より年上の所有児に対して初期遠慮行動をとった者が多くは見られた。

⑤共有期間の有無について O月齢群の子どもが所有児である、O-O群、O-M群において共有期間のないケースが多い。O-O.O群のように、相手の非所有児が年上の場合には、共有期間はすべてのケースに見られる。

討 論

今回の結果から、8~11カ月において、すでに子どもには「こうしたい」という意志があり、それが2歳までの間に「自分だけでしたい」という気持ちが次第に強くなっていくという仮説を立てることができよう。今後この仮説をさまざまな方法で検討していく必要がある。

また、1歳3カ月以上の子どもの場合、相手との月齢差によってとる行動が違うことが示唆された。8カ月~2歳1カ月においては、月齢が上であることが物の占有児となる条件のようである。

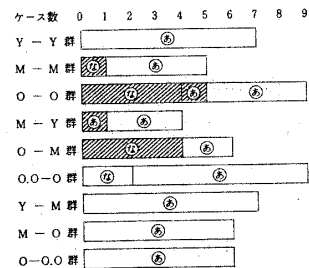


Fig. 2 初期占有行動のケース数と共有期間の有無

- 初期占有行動が含まれているケース
- 初期占有行動が含まれていないケース
- 共有期間のないケース, ⊙ 共有期間のあるケース